

碧色の入江あおいろく能登島箱名入江はこないらえ

能登島曲町へ

七尾市街地から車で約30分、能登島曲町へ向かう。能登島大橋を渡り、主要地方道七尾・能登島公園線、県道田尻・祖母浦・半浦線から曲町へ向かう。向田からの海岸線沿いはカーブする道が続く。海には釣り筏が浮いているの見える。

能登島ガラス美術館の下を通り過ぎると、眼下には曲の漁港と集落が広がる。寄り添うように立っている家々の黒い瓦が一面に見え、日差しを浴びて波のようにキラキラと輝いている。

しばらく走ると右手にのどじま臨海公園へのアーチ型の入口が現れ、さらに直進すると背の高い杉が林立し、木陰であったりは薄暗くなったような気がした。少し走るとあたりが開け、田園が広がったかと思うと、また寂しげな雰囲気ふしげなの道が続く。その鬱蒼ふさふさとした杉木立の隙間から、目の覚

めるようなエメラルドグリーンエメラルドグリーンの色をした水面が見えてきた。その色が何なのかを早く確かめたくなくて車のアクセルを踏み込んでスピードを少し上げた。

水ぎわへ降りていく入口を見つけ、細い道を下に降りていくとそこは、奥深い入江だった。



「能登自然を歩く」箱名入江 昭和62. 6. 2
小牧 旌 著 七尾市立図書館友の会刊

神秘的な碧色の入江あおいろ

この入江は、「箱名入江」といい、湖のように波が静かである。海の青とも違う碧色で神秘的な色をしている。地元では、「箱名の入江」と呼ぶ

ようである。幅200m、奥行き1400mもあり、面積は0.3km²ある。曲と南の集落の間、植木鼻と牧鼻にはさまれた七尾湾北湾に面するこの入江は、湾頭最深部で深さが25mある。水が澄んでいるときは、7〜8mほど下が見えることもあるという。

その日の天気にもよるだろうが、空の青さと両岸の森の緑と入江の深さがこの色を醸し出しているのだろうか。いづれにしても、このような形容しがたい美しい深みのある色は、なかなか見られないものである。

次の漢詩は、明治45年に初版された「能登島地方誌」に、箱名入江について書かれていたものである。作者は不詳である。

「曲り村 箱名湾」

蘿 徑 通 虚 谷
蕭 索 夾 灣 山
人 道 蛸 浮 浪
時 爲 雅 曲 閑

「曲り村 箱名の灣」

蘿徑は虚谷を通り

蕭索として灣山を夾む

人道ゆけば蛸は浪に浮き
時に雅曲を爲して閑なり

(書き下し文 栄町 古田励子氏)

蘿徑…つたかずらの生いしげ

つたこみち

蕭索…ものさびしいさま

(広辞苑より)

いつ頃書かれたものであろうか。なんとなくではあるが当時の面影が残っていることに感動を覚える。

釣り人が訪れる入江

箱名入江には、かつて県の増殖試験場があつたが、現在



は、釣りの人気スポットとして知られている。この入江で釣り筏業を営む「マリソフアーム箱名」の若田さんにお話を聞いたところ、毎月平均250人くらいの人が釣りに訪

れ、土日は多くの人で賑わうそうである。富山県などの県外からの釣り客が6割、県内の釣り客が2割を占めるといふ。

クロダイ、アジ、コチ、ヒラメ、カレイ、キスなどが捕れ、波が穏やかなため釣りがしやすく、あまりの波の穏やかさに湖ではないかと驚く人も少なくないそうである。

また、釣り以外にも家族連れでピクニックに訪れる人もおり、秋には、紅葉がとてもきれいだという。入口が狭いせいか漂着ごみがほとんどなく、非常に美しい入江である。

この美しい自然のままの入江をいつまでも、残したいものである。秋には、箱名入江の紅葉を見ることができたらう。

入江を琥珀色に染めて陽が沈んでいく



(参考資料：能登島地方誌)

DATA

民話 釜かぶりタコ



その昔入江の西側の釜に住み人々から釜かぶりタコと呼ばれ恐れられていた大ダコがいました。

あるとき、東側の牧山に住む大蛇と大ダコのけんかが始まりました。この闘いは箱名入江を舞台に三日三晩続き、両者は食うか食われるかの大格闘をし、とうとう大ダコの勝利に終わりました。

何日かたって、この入江から大蛇の死体が流れ出て、ある島に漂着しました。その島は「重蛇島」と呼ばれるようになりました。